

多重と反復

能登の声から考える

金沢大学 能登里山里海未来創造センター

特任准教授 高原耕平



1. 鞭打つ自然

自然が自慢の能登がなぜこれほどまで自然に鞭うたれなければならないのだろう。¹⁾

多重被災について考えようとしたとき最初に思い出したのが、穴水町の女性が書いた手記のこの締めくくりの一文だった。手記の本文によれば、著者は令和6年能登半島地震発災当時92歳である。のと里山海道を息子家族と移動中に元旦の地震に遭い、いったん七尾市田鶴浜の避難所にたどり着く。「穴水へ帰りたい一心」だったが、息子に勧められ金沢に行く。着の身着のままの避難となったが、金沢では親族に助けられたことを綴り、「それもこれも先祖のお蔭」と感謝の念を記す。続編の手記では金沢に5ヶ月間滞在したのち、穴水へ帰ったことが記されている。故郷の風景を眺めて彼女はこのようなも嘆いた。

昔の町の佇まいは消え、人々のざわめきもなくなってしまった。美しい自然は変わらないように見えるが、喪失感は大い。 ²⁾

これらの手記では2024年9月の奥能登豪雨については述べられていないが、引用した「自然が自慢の能登がなぜこれほどまで自然に」という問いかけと「喪失感」は、この多重被災を経た能登のひとびとに広く共有された感情ではないか、と想像する。

ここで着目したいのが「自然」と人間の関わりである。自然が「自慢」とは、ただそれが観光や一次産業上の価値を持つというだけの意味合いではないだろう。そこに響いているのは、自分たちが自然を大切に

してきた、その営為を通じて自然の価値を引き出してきたという自負の感情である。「自慢の子ども」「自慢の弟子」と言うときの「自慢」に近い。また、その自慢が成立するためには、引き出された価値が自他に公開され通用するものであることも必要である。見せびらかしたり、傲岸に振る舞うのではない。自他に通用する普遍的な価値になんらかの仕方で関わっているという感覚である。その関わりとは具体的には日々の生活であり、農漁業とそれに関連する経済活動の総体、自然の出来事の観察と対応といったことであり、風浪寒雪の厳しさに耐えて生きるということも含まれるだろう。

そのようにして関わり、普遍的な価値をみがき続けてきた自然に「鞭うたれ」る出来事がこの多重被災だった。著者が「自然を自慢にしてきた能登の人々が」ではなく「能登が」と書いていることに着目したい。自然と人間という一般的な対比を持ち込むのであれば、「自然」が鞭打つのは人間である。しかし著者は自然からの受苦の主体を「能登」と書いている。この「能登」とは、単なる地理的区分ではないだろう。郷土、アイデンティティであり、著者を含めた住人たち、また「先祖」や子孫の連続性であり、上述のように自然と共に生きてきた営為の蓄積としての「能登」である。

だとすれば、その「能登」には「美しい自然」も含まれるはずである。含まれるというより、「能登」の根幹を成す存在であるだろう。自然が自慢の能登が自然に鞭打たれるとは、能登の外部にあった、あるいは能登に隣接していた「自然」なるものが能登を傷つけるという意味ではない。自然とかなりの程度において一体であり、完全に癒着しているのではないにしても

自然と生活が多能的に重なり合ってきた歴史的な積み重ねこそが「能登」であったのに、そのかたちが突然崩されてしまった——という感覚に近いのではないか。それはいうなれば、身体が半身ずつに半ば裂け、その一方の半身がもう片方の半身に厳しい鞭をふるうという出来事である。だから鞭が届かない安全な場所に逃げるとか、防御システムを構築するといった対応はピントがずれていることになる。

このような解釈を採るとき、先に引用した「喪失感」は、町の佇まいやざわめきの消失のみを理由とするものではないと思える。つまり自然の美しさという片方の価値は保存されているものの人間社会の活力というもう半面は衰えてしまったという嘆きではなく、町のざわめきと自然の美しさがいまや一体のものではないということへの喪失感である。以前にはそれらは一体のものであり、その総体が「能登」だった。しかしその一体性は半ば裂けた。自然は人間からの関わりをもはや求めず、それがなくても独立して美しいままである。先祖からの連続性において培われ、日常の水平の関わりにおいて息づいていた自然が、いまや遠く眺めるものになってしまった。かといって都市型の生活や感覚にシフトすることもできない。この寄る辺なさに喪失感の根があるのではないか。

この解釈が仮に正しいとするならば、多重被災からの復興とは、個々人・世帯・集落の生活再建であるだけでなく、自然との一体性を持った「能登」の回復であり、それはまた自然との和解の過程でもある。ここで自然を人間と対話が可能な主体だとみなすことはできないので、和解という表現は擬人化の誹りを免れない。あくまで比喩表現であることを断りつつであるが、しかしこれに類する営為が必要である。それは手記著者の「なぜこれほどまで自然に鞭うたれなければならないのだろう」という問いへの答えを探すことでもある。

復興研究とは、こうした問いへの答えを探す被災者の過程に知を尽くして同道する営為だと思う。「それは、……だからだ」という答えを被災者の代わりに見

つけてきて、差し出すことではない。模索の過程そのものが被災当事者の尊厳に関わる。

本稿は反復という観点からこの道行きの石畳の石をいくつか運ぼうとする。小林（2025）が提唱する多重被災は、繰り返しの被災による質的な影響、特に心理的なそれに着目する⁴⁾。本稿はこの多重被災の心理的過程の根幹に、前章で検討したような自然との一体性の喪失があるという仮定に立つ。あらかじめ主要な論点を先に示しておく。人間は自然と多能的に関わりながら自然の反復と相似した反復を複写するが、合わせて出来事を非反復的な経験として記憶することで人生と共同体の物語を構成する。人間の有限な生は反復と非反復の継ぎ合わせである。しかし多重被災は、自然の反復を人間に強要することで、この継ぎ合わせを裂いてしまう。

2. 反復と災害

(1) 反復と自然

自然災害が反復するとは、似たかたちの災害が繰り返し起きるということである。反復には空間のそれと時間のそれがある。空間的な反復は、同じものがあちらこちらで生じることである。アザミが野原のここにもあそこにも咲いている。そのとき、ひとつずつのアザミの株と花に固有名を付けない。いずれも同じアザミだが、ここにも、ここにも、と個別のものとして見つける。見つけたのに区別を永続化せず、また同じアザミとして風景のなかにまぎれてゆく。個別なものがそれとして発見されながらすぐさま個別性を失うこと、その暫時性が反復の契機である。

時間的な反復は同じものがいくらかの間を置いて生じることである。今年もアザミが野原に咲いた。時間的な反復は、それが固有の周期を持つときいっそう強調される。一昨年も昨年も咲いていたアザミが今年もまた咲いたとき、来年もまた同じように咲くことをひとは期待する。もっとも強固に意識される周期は季節である。しかし正確には、周期的であるから時間的な反復を認めるのではない。その反対で、反復を認識

してからその周期を意識している。季節という周期もまた、山河草木のあらゆるところに反復を見出してから成立したのであって、季節が先に把握されるのではない。

(2) 自然災害と反復

ところで、反復するのは自然現象であって災害ではないのではないか。自然災害 Disaster のリスクは、自然現象 Hazard、曝露量 Exposure、人間社会の脆弱性 Vulnerability、強靱性 Resilience を変数とする³⁾。曝露量はハザードの発生頻度を含んでいる。自然法則にしたがってハザードはしばしば一定周期を伴って発生する。一方、脆弱性は人間の努力によって低減させることができ、強靱性も向上させることができる。したがって、自然が周期的に大きなエネルギーを放出しても、人間の努力がそれに追従することで、ハザードが自然災害に発展するのを防ぐことができる。人間の努力は自然災害の反復を食い止めることができるはずである。

たとえば同じ震度 6 弱の揺れに対して、戦前期の家屋は大きな被害を受けるが、最新の木造家屋であればそう簡単に損傷しない。これは幾度もの地震災害を経て耐震基準（建築基準法とその施行令）が改正を重ねてきたからである。

では技術は災害を超克するか。現実には逆で、自然現象の反復に伴って自然災害も反復する。それはひとつには、時間のスケールの差のためである。自然現象の時間スケール（発生周期）、人間が生活環境から脆弱性を減らし強靱性を増してゆく技術的社会的な時間スケール、そして人生の時間スケールがある。自然現象の周期はさまざまであるが、おおまかには、自然の構造が放出するエネルギーの大きさと周期の長さは相関する。巨大な自然現象ほど稀にしか生じない。

人生の時間スケールは技術的社会的な時間スケールより小さい。新しい耐震基準の建物が古い基準の建物を置き換えるには数世代かかる。大河川の改修は 100 年の単位で進む。そのため、技術と社会が以前の災害への対応を完了するより前に、人間が次の災害に

被災する。

加えて、いったんは技術的社会的な対策が実装されても、人間がその運用を忘却する。

災害直後時を移さず政府各方面の官吏、各新聞記者、各方面の学者が駆付けて詳細な調査をする。そうして周到な津浪災害予防案が考究され、発表され、その実行が奨励されるであろう。さて、それから更に三十七年経ったとする。その時には、今度の津浪を調べた役人、学者、新聞記者は大抵もう故人となっているか、さもなくとも世間からは隠退している。そうして、今回の津浪の時に働き盛り分別盛りであった当該地方の人々も同様である。そうして災害当時まだ物心のつくか付かぬであった人達が、その今から三十七年後の地方の中堅人士となっているのである。[……] これが、二年、三年、あるいは五年に一回はきっと十数メートルの高波が襲って来るのであったら、津浪はもう天変でも地異でもなくなるであろう。⁵⁾

この有名なエッセイで、寺田は科学技術の開発・運用（「周到な津浪災害予防案」）と、その社会的運用を区別している。前者は漸進するが、後者は人間が取り扱うものであり、世代に規定される。人生の時間スケールが自然現象の周期と比べてあまりに短いために忘却の問題が生じる。

さらに、技術発展は不可逆的で右肩上がりのものと信じられているが、数世紀のスケールで見れば必ずしもそうではない。単体で見れば科学的知見や技術水準は漸進を続けているように見えるが、それらの土台となる社会はより長期的な歴史のうねりに揺さぶられる。今後 100～200 年のうちに、日本の経済や社会的安定性が瓦解し、建築基準法が骨抜きにされるような事態も起こらないとも限らない。国家の興亡には十分な時間だが、自然現象にとっては誤差の範囲内である。

最後に相転移の問題がある⁶⁾。科学技術の発展と都市の密度の増大が、脆弱性をむしろ増大させる。富士

山の宝永噴火（1707）の際には羽田空港も成田空港も無かったし、データセンター群も大宮駅も、酸素吸入器も人工透析も無かった。

このように、人間は自然現象に対抗する術を発達させるけれども、それでも災害は繰り返し起きる。自然現象は規模に伴った周期で反復するということが災害研究の第一原理であるとすれば、自然と人間社会の相関によって生じる自然災害もまた反復するという第二原理をもわたしたちは受容しなくてはならないはずである。

3. 多重被災という体験

多重被災ということが起きてしまうのは、自然災害が反復するためである。その苦しみの本質は何か。それはまず、ただ単純に、被災の苦しみが重なり、深くなることである。言うまでもないことだが、被災は一度であっても人生への打撃である。それが複数回となれば苦痛と疲労はあまりにあまりに深い。

しかしこれは苦痛の量的な側面である。仮に被災者援護の制度がきわめて充実し、被災者が失った住居・財産が即座に補償され、被災地では発災半年後に恒久住宅再建が始まるとすれば、そして何度被災してもそのたびに十二分の支援が全ての被災者に行き渡るのであれば、多重被災の苦痛のほとんどは消えるということになるだろう^①。

しかし、仮にそのような被災者援護制度が揃っていたとしても（それが望ましいに違いないのだが）、それでもなお残る苦痛の核があるように思われる。もし多重被災の苦痛が量的なものに終始するのであれば、本学会が提唱する被災者支援が十全に実装された暁には、多重被災の問題は消失することになる。だが仮に十分な被災者支援・補償があったとしても、本稿冒頭の「自然が自慢の能登がなぜこれほどまで自然に」という問いや、自然との一体性を失うことによる「喪失感」はなおわだかまるのではないか。

問題は、反復する自然と人間の関わりにある。自然災害の反復は、自然と人間の関わりにおいて生じる。

ここで、災害は自然が与えるさまざまな反復現象の一部であることを思い起こしたい。

自然と境界帯をかたちづくりながら生きる時、ひとは空間的・時間的な反復をいたるところに見出す。雑草は畔にも住家の周囲にも繰り返し生え、人間はそれを繰り返し刈る。農事、漁、家畜や野生動物の繁殖は季節に合わせて周回する。反復を見出すことは、同じものを大量に、安定して獲得することである。見出したものをひとつずつ別個のものとして把握していたら、つまり木の実、海藻、畝のそれぞれを区別していたら、健康な生活は送れない。

自然の反復をひとは自身の営為に複写し、取り込んでゆく。生活の同じ所作を繰り返し、周期的な行事を企画する。特に、生活においてはひとつずつの所作を見出すということがない。日常の所作をひとつずつ見出し、別個のものとして把握していたら、健康な生活は送れない。

しかし一方で、人間は自身の身に起きた特異な出来事をひとつの体験として記憶し、個別のものとして名付けることがある。反復があるからこそ特異なものを見出す。しかし、個別のものを全て個別なまま把握していることは難しい。たいてい、個別のもの、特異なものが、日常から現れ、日常にまぎれてゆく経緯をひとつの物語に再構成する。それらの物語は多く集まるうちに個別性を失い、反復してゆく。個別のもの、特異なものを見出すこと自体が、日常的なことになってゆく。そのなかでもやはり特異な体験、特異な物語が現れる。自然は反復を限りなく続けるが、人間の有限な生は反復と非反復の継ぎ合わせである。

人間は自然から反復と非反復を汲み取ってくる。反復のみであれば人間は自然と一体化してしまう。自然との関わり方は、反復と非反復の汲み取り方である。「自然を自慢にしてきた能登」とは、能登の生活がさまざまな仕方で反復と非反復を取り入れてきたということでもある。ここではそのひとつずつを分析することはできないが、しばしば語られる「能登らしさ」とは、反復と個別性を自然に見出し利用する所作の織

細さと強靱さにあるように思われる。そしてときには祭礼のような人間の営為が、自然の反復に力を与えてきたかもしれない。

本稿の主張は以下である。多重被災とは人間が自然から過剰に反復を強いられる体験である。反復と非反復をどのように自然から取り入れるか、人間にはある程度の選択の余地が与えられてきた。つまりどれだけ同じものを見出すか、そのなかから個別のものをいつ見出すか、人間がそれなりに制御できていた。自然と人間のあいだに合意があるかのように理解していた。多重被災はこの「合意」を破棄する体験だった。繰り返すもの、いちどきりのもの、無限の山河草木と有限の人間の生、それらが関わり合うことで保たれてきたリズムが失われた。自然は人間の都合を顧みることがなく、ただ災害を反復させた。物語を編むより先に鞭がうなった。

補注

- (1) 議論を単純化するため、ここでは「苦痛の量的な側面」を家屋・家財など金銭的な支援等で回復しうるものに限定している。しかし身体健康や生命など、量的かつ回復不能な苦痛がある。被災者支援の制度がどれだけ充実したとしても、失った健康や生命の代わりにはならない。そして実際のところ、多重被災は被災者の心身に過大なストレスを与えるし、あるコミュニティが何度も仲間を喪うような出来事は、支援や金銭で回復するものではない。

参考文献

- 1) 北川美恵子（2025），能登大地震，志多民 穴水町文化懇話会文芸誌，46 号，pp.21-23.
- 2) 北川美恵子（2025），地震の後，志多民 穴水町文化懇話会文芸誌，46 号，pp.24-26.
- 3) 伊藤和也，菊本統，下野勘智，大里重人，稲垣秀輝，日下部治（2017），我が国の自然災害に対するリスク指標の変遷と諸外国との比較，自然災害科学，36（1），pp.73-86.
- 4) 小林秀行（2025），多重被災における「申し訳なさ」と「情けなさ」の内実，災害情報，23（1），pp. 13-24.
- 5) 寺田寅彦（1933），津浪と人間.
- 6) 河田恵昭（1995），都市大災害，近未来社.